

『為兼卿和歌抄』の歌評語「いきほひ」について

檜 垣 駿

はじめに

京極為兼の歌論書『為兼卿和歌抄』（以下『和歌抄』と称す）は、為兼の歌論を知る第一の資料である。伝本は、(1)宮内庁書陵部蔵本・(2)陽明文庫蔵本・(3)聖護院門跡蔵本の同系統の三本に、(4)冷泉家時雨亭文庫蔵本の一本が知られている。⁽¹⁾成立は、弘安八（一二八五）年から同一〇（一二八七）年の間、特に弘安一〇年、為兼三十四歳頃と考えられている。⁽²⁾執筆の動機・対象については、東宮熙仁親王（後の伏見院）のために執筆したものと推定されている。⁽³⁾

従来、為兼の歌論については、特にその思想を中心に研究されてきた。⁽⁴⁾一方で、その根本的な資料である『和歌抄』

について、歌論中に珍しい用語があるにもかかわらず、具体的かつ詳細な検討は十分になされていないと言える。本稿では、そのなかでも、特に重要な歌評語であると思われる「いきほひ」に注目する。

歌評語「いきほひ」は、管見の限りでは『和歌抄』に二例、『二十番歌合』（乾元・嘉元）の伏見院による判詞に一例、『野守鏡』に一例確認されるのみである。用例は非常に少なく、京極派関連の和歌資料に限られている。後に詳しく述べるが、為兼は、「いきほひ」を歌の基本的な要素として捉え、自身の歌論の眼目と深く関わるものとして位置づけていたと考えられる。また『二十番歌合』では、伏見院も判詞に「いきほひ」の語を用いており、院もこの歌評語を重要視していたと理解されている。⁽⁵⁾

このように、歌評語「いきほひ」は為兼歌論の特徴を示

す語であり、その具体的な意味を明らかにすべきである。以下、本稿では、為兼がなぜ歌評語「いきほひ」を用いて、この要素にどのような意味づけをしていたのかということ考察していきたい。

一 『為兼卿和歌抄』の「いきほひ」

『和歌抄』において「いきほひ」は二例確認される。一例目は次の箇所にある（本文・傍記及び「」内の章段名は、小川剛生氏の『歌論歌学集成』により、傍線・□・英字は私意による。以下同じ）。

【4】「寛平以往」の論

万葉の比は心のおこる所のまゝに同事ふたゞびいはるゝをもちからず、藝晴もなく、哥詞・たゞのこと業ともいはず、心のおこるに随而ほしきまゝに云出せり。心（の）自性をつかひ、うちに動心を外にあらはすにたくみにして、心も詞も^①性も性もいうも^②いきを^③ひも、をしなべて作者の□□□□□□^④かれもこれもすべてあらぬ事なるゆへに、たかくも、ふかくも、をもくもある也。

『為兼卿和歌抄』の歌評語「いきほひ」について

便宜上、右記の「いきほひ」をAとする。Aは万葉歌を称揚する文脈にある。万葉歌は、心の「自性」^⑤を用いて、感動する心を表現することが上手であつて、「心」「詞」「性」「性」「性」「いきほひ」も、作者の「□□□□□」（本文欠損）も、全て作者の想定外の範囲外のものだから、「高く」も「深く」も「重く」もあるという。和歌の規範に拘泥せず、心そのままに歌を詠むことで、歌の性質が優れたものとなつていたことを説くのである。

Aの直前では、寛平以前（「万葉の比」）は「心のおこる所のまゝ」に歌を詠んでいたことが述べられており、その方法によつて顕著になる要素として、「心」「詞」「性」「性」「性」「いきほひ」が挙げられている。このうち「心」「詞」「性」「性」は、『和歌抄』以前から、歌の基本的な要素として用いられてきた歌評語であるが、「性」「性」「性」も、これらの要素と並列関係にある。したがつて、為兼は「性」や「いきほひ」を、歌の基本的な要素として捉えていたと考えられる。また岩佐美代子氏は、『和歌抄』の本義は「心のまゝに詞のほひゆく」表現を行うことであるとされるが、当該箇所もまさに「心のまゝ」を庶幾する文脈である。「いきほひ」他の要素は、この表現の達成によつて顕著な

ものとなり、万葉歌は『和歌抄』の論旨に適う和歌として
 称揚されているのである。

二例目の「いきほひ」は次の箇所にある（※は稿者による）。

【9】対象との同化

中納言入道（※定家）申けるやうに、上陽人をも題
 にて詩をもつくり哥をもよまば、その才学をのみと
 めてつゞけてよむうちにもよしあしおほけれど、ひと
 つわのうちなり。又それよりは心に入て、さはありつ
 らむと思やりてよめるは、あはれもまさり、古哥の舛
 にも似也、猶ふかくなりては、やがて上陽人になりた
 る心ちして、なく／＼ふるさとをもこひしう思、雨を
 もき、あかし、あさゆふにつけてたへしのぶべき心ち
 もせざらむ所をも、能々なりかへりてみて、其心より
 よまん哥こそ、あはれもふかくとをり、うちみる、ま
 ことにこたへる所も侍べけれ、といふに委心をかし。
 されば恋ノ哥をばひきかづきて、人の心にかはりても
 なく／＼その心を思やりてよみけるとぞ。かやうにむ
 かはぬ人の哥は、さは／＼とも、おもしろきやうなる
 はあれど、いかにぞ、いふのそひ、^Bいきおひのふか

き事はなくて、古哥にかはれる也。

便宜上、右記の「いきほひ」をBとする。Bは、定家の
 言説を借りて、対象との同化を庶幾する文脈にある。白居易の「上陽人」の詩を題に詠む場合を例として、歌は、対象（上陽人）になりきって詠むべきことを説いている。意識だけを請い求めて詠めば、良い歌も悪い歌も多くできるが、ある領域を出ない。それに対して、対象を「思やりて」詠み、さらに深く「上陽人になりたる心ち」になつて詠むことで、情趣も深くっており、本当に感じるところもあるという。そしてこのように対象に相對さない人の歌は、さつぱりとして趣のあるようなものはあるが、「優」が添つて「いきほひ」が深いことはなく、古歌とは違つていと説く。

対象に相對し、それになりきつて歌を詠むという、「和歌抄」の眼目とも言える内容である。^B対象に相對し、それになりきつて歌を詠まない人の歌は、歌に「優」が添い、「いきほひ」が深いことはなく、古歌とは違つている。言い換えれば、「いきほひ」が深くなるためには、対象に相對し、それになりきつて歌を詠む必要があるということになろう。そして、古歌、つまり万葉歌はそのような方法で

歌が詠めていたために、「優」や「いきほひ」が伴う歌だったのである。

右のように本文を考察すると、『和歌抄』の「いきほひ」には、次の二つの特徴が認められる。まず一つ目は、いずれの例も万葉歌を意識した文脈の中にあり、「いきほひ」は万葉歌に顕著な要素として捉えられているということである。そして二つ目は、いずれの例もそれぞれ『和歌抄』の核心を述べる文脈の中にあり、その達成の結果、顕著になる要素と捉えられていることである。藤平春男氏は為兼歌論の核心について、「主客融一の美的観照論」と「心のままに詞のほひゆく」という心詞論の二つがあると説かれて⁽¹⁶⁾いる。この見解は妥当であり、氏の言葉を借りて述べるならば、Aの「いきほひ」は「心のままに詞のほひゆく」という心詞論を、Bの「いきほひ」は「主客融一の美的観照論」を述べる文脈の中にそれぞれあつて、「いきほひ」は、それらの達成によって顕著になる要素として捉えられていることになろう。『和歌抄』本文からは、「いきほひ」の特徴として、以上の二点を読み取ることができ⁽¹⁷⁾る。

二 伏見院判詞の「いきほひ」

『二十番歌合』は、伏見院が主催したと思われる京極派の歌合である⁽¹⁸⁾。成立は乾元二（一三〇三）年から延慶元（一三〇八）年とされており、衆議判ではあるが、判詞の執筆者は伏見院と考えられている⁽¹⁹⁾。参加歌人は左方が、伏見院（御製）・永福門院（中将）・源親子・新宰相で、右方が、京極為兼・京極為子（藤大納言内侍）・後伏見院（女房）・永福門院内侍である。歌題は、雲・庭・木・鳥・舟の五題で、伏見院と為兼の歌は五回番えられている。院の勝が三回、為兼の勝が二回で、この歌合から四十首中八首が『玉葉集』及び『風雅集』に入集している。

当該歌合十九番では、伏見院の判詞に「いきほひ」の言葉が用いられており、注目される（傍線・□は私意による）。

十九番 左

御製

あま小舟島めぐらしいさり火の見えつる影の又かく
れぬる (37)

右勝

為兼

物としてはかりがたしやよわき水におもき舟しもうか
ぶと思へば⁽³⁸⁾

左右船、左は、わづかにみる所につきてよめるばかりなり、右、そのことわりにもたれておほきに
いひくだせり。心詞のさま、おもひよれる⁽³⁹⁾いきほ
ひも、勝劣のさたに及ぶべからざるよし申し侍り
て、勝の字を付了。

十九番の題は「舟」である。左の伏見院歌は、漁師の小舟の姿が、漁り火とともに鳥に見え隠れするさまを詠んだ叙景歌である。対して右の為兼歌は、重い舟が弱い水に浮かぶという理から、その舟が物質としては量り難いことを詠んだ観念的な歌である。

判詞の「いきほひ」は、為兼歌について用いられたものであるから、まずは為兼歌を理解する必要がある。ただ、当該歌は観念的な歌であるため解釈が難しく、これまでも先学によって盛んに論じられてきた。以下、当該歌を理解するために先行研究をまとめておきたい。

まず、土岐善麿氏が「書経」にある禹貢伝説を典拠として指摘されたが、言葉の重なりや意味の面から、これを典拠とするのはやや無理があろう。以後の研究者もこれを

採っていないので、氏の論については紹介にとどめておきたい。次は大坪利絹氏が、「荀子」の「伝曰、君者舟也、庶人者水也、水則載⁽⁴⁰⁾舟、水則覆⁽⁴¹⁾舟、此之謂也。(伝に曰く、君なる者は舟なり、庶人なる者は水なり、水は則ち舟を載せ、水は則ち舟を覆す、とは、此を之れ謂ふなり。)」が典拠であることを指摘された。この文言は「平家物語」などにも見え、人口に膾炙していたと指摘されている⁽⁴²⁾。当該歌合における為兼の他の観念的な詠を見るに、当該歌も何らかの典拠と意図を持って詠まれていると考えられる。以後の研究者もこれに倣っているが、稿者も「荀子」の当該箇所を典拠とすべきだと考える。次に深津睦夫氏は、当該歌を「理世歌」と考えたいとしたうえで、「非力な臣すなわち為兼によつて、重大な存在である君すなわち伏見院が支えられていることを、「物としてはかりがた」といって詠んでいると見るべきではないか」とし、また、「自分の非力さにもかかわらず、存在し得ている院に対する賛辞」であると解釈された。この深津氏の解釈をふまえつつ、鹿目俊彦氏は、永仁六(一二九九)年為兼佐渡配流、嘉元元(一二三〇三)年帰還、正安三(一二三〇一)年正月、在位三年で後伏見天皇が讓位し、政権が大覺寺統に移ったという、

当時の時代相を重視し、為兼の賛辞は伏見院だけでなく皇統にまで及ぶものとされている²⁷⁾。さらに岩佐美代子氏は、「物それぞれの本性としてその相互の微妙な均衡によつて宇宙の調和は保たれている、という、人知では量りがたい深遠な宇宙の摂理を賛嘆する思想詠」とし、これに、院を支える為兼自身という感動と自負とが加わったと考察されている²⁸⁾。

稿者としては先学のうち、深津氏の見解が最も適當であると考ええる。当該歌合以前、為兼の配流中に持明院統が短期間で政權を奪われている。このような時代背景をふまえると、「おもき舟」に対して、ことさらに「よわき水」と表現したのは、為兼自身の無力さの認識から生まれたものと考えられよう。当該歌は、『荀子』を典拠とし、院を舟に、為兼を水に例え、為兼のような非力な臣下の上であっても、確かに君臨する伏見院の偉大さを詠んだものとするのが適當である。

では、このような解釈をふまえて伏見院の判詞について考察する。判詞では右歌が、弱い水に重い舟が浮かぶという「理」に寄りかかって、「おほきにいひくだ」し（はつきり滞りなく表現し）たことを評価している。歌の解釈に

『為兼卿和歌抄』の歌評語「いきほひ」について

基づけば、この「理」とは、弱い水に舟が浮かぶという事物としての道理を意味し、「いひくだ」したことは、非力な為兼の上に院が存在することを意味すると考えられよう。つまり院は、右歌の作者が普遍的な「理」を、院と為兼の關係に当てはめたことを評価したのであろう。そして院は、右歌に対するこのような評価のなかで、「おもひよれる（思いついた）いきほひ」を格別に評価している。よつて、ここで言う「おもひよれる」とことは、「理」を「いひくだ」した作者の発想を指すと考えるべきであらう。「いきほひ」はその発想によるものなのである。したがつて、「いきほひ」とは、舟が水に浮かぶという道理から、院と臣下の關係にまで思い至つた、作者の発想の力（氣勢）を意味すると考えられよう²⁹⁾。

そして、この「いきほひ」は、為兼歌が対象に「なりかへる」という主客融一の歌を體現したことによる評価であると考えられる。このことは、『和歌抄』の「まこと」という概念をふまえることでより明確になる。なぜならば、次の引用箇所にあるように、対象に「なりかへる」という方法は、その「まこと」³⁰⁾を明らかにするために行うものと考えられるからである。

【6】心の持ち方

花にても月にても、夜のあけ日のくる、けしきにても、その事にむきてはその事になりかへり、そのまことをあらはし、其ありさまをおもひとめ、それにむきてわがこゝろのはたらくやうをも、心にふかくあづけて、心にことばをま〔か〕するに、有^レ興おもしろき事色をのみそふるは、こゝろをやるばかりなるは、人のいろひ、あながちににくむべきにもあらぬ事也。こと葉にて心をよまむとすると、心のまゝに詞のほひゆくとは、かはれる所あるにこそ。何事にてもあれ、其事にのぞまば、それになりかへりて、さまたげまじはる事なくて、内外と、のほりて成ずる事、義にてなすとも、その気味になりいりて成と、はるかにかはる事也。引用箇所は、岩佐美代子氏によつて、唯識説に依拠した言説であることが指摘されているが、今は「まこと」の言葉に注目して当該箇所を考察していきたい。傍線部では詠歌方法を順序立て、「その事にむきては」から順を追ひながら説いたものと理解されるが、「なりかへ」ることに続くのは、「そのまことをあらはし」し「其ありさまをおもひとめ」ることである。詠歌方法の順序は、それぞれ前後に

連関しており、「花」や「月」などの対象に「なりかへ」ることによつて、「そのまことをあらはす」段階に繋がっていく。つまり、「なりかへ」ることは対象の「まこと」を明らかにすることを目指して行われる方法であると言えよう。対象と一体化することによつて「まこと」は明らかになるのである。

この「まこと」認識をふまえると、「二十番歌合」の為兼歌も、まさに対象に「なりかへ」つて「まこと」を捉えた歌であつたと言える。当該歌は、水に浮かぶ舟の姿に、院と自身（為兼）の関係を重ねていた。対象と作者が一体化し、両者に共通する「まこと」の一面を明らかにしているのである。そのように考えると、伏見院が「いきほひ」の言葉で評価した為兼の発想は、対象の普遍的な本質を捉えた、まさに「まこと」に通じるものであつたと言えるのである。

以上のことから、伏見院判詞の「いきほひ」は、為兼の「まこと」に通じる発想そのものの「いきほひ」であつて、作者の発想の瞬間的な力（氣勢）を意味するものと考えられる。「まこと」に通じることが「いきほひ」の程度につながることは、『和歌抄』Bで「いきほひ」が「ふかき」

の言葉で形容されていることと軌を一にするとと思われる。

また、伏見院判詞の「いきほひ」は、言うまでもなく作者の性質である。しかし、『和歌抄』が「心のままに詞のほひゆく」ことを、歌論の一つの核心としていることをふまえれば、作者の発想の「いきほひ」は、そのまま歌の「いきほひ」となると考えられよう。

三 『野守鏡』の「いきほひ」

『野守鏡』は、主に二条派的立場から京極派（為兼）の新風和歌を批判する内容を持つ、永仁三（一二九五）年成立の歌学書である。^③『和歌抄』より後の成立であると考えられるが、本書の作者が『和歌抄』を見たか否かは明らかでない。ただ、本書には『和歌抄』の「いきほひ」に極めて近いと考えられる用例がある。作者が『和歌抄』を見たか否かはひとまず措くとして、同時代の歌書に、『和歌抄』の用例に近い意味の「いきほひ」が用いられていることには注目すべきであろう。歌人としての立場は逆であつても、そこには同じ時代の思考回路や価値観が横たわっていると思われるからである。以下、『野守鏡』をとおして、『和歌

抄』の「いきほひ」について考察してみたい（数字記号・※は稿者による^④）。

一、古風をうつして古風をうつさざる事

①それ古今の古風をば写して、万葉の古風をばうつすべからず。其故は、万葉はあまねく由緒ある心詞をさきとして、歌いまだやはらがざりし風にて、今の世のき、をとほくせり。（中略）^②然にかの卿（※為兼）およびざる万葉の風をねがへるにや、たゞおほす、きのおほやうなる歌どもおほくきこえ侍り。為家卿はかの集の歌を、本歌にとる事をだにもいましめ侍りき。その子孫としてなどや鶯のかひこの中の時鳥にてしもは侍りける。^③上古の歌は世あがり人かしこくして、其心時になかへるゆゑに、心詞ともにたゞしくて、おほやけしきすがたあり。^④たとへば不動愛染王などの降魔のかたちにて、おそろしげなる御すがたなれども、内に慈悲の御心あるによりて、むかひたてまつればたふとおほゆるがごとし。^⑤いま世くだり人おろかにして、其風時にしたがはず、そのすがた身におよばざるをかへりみず、これをまなばむに、あに上古のごとくならむや。^⑥たとへばをさなき子に鬼の面をきせた

るが如し。たゞおそろしげなるかたちばかりは見えて、まことによわ／＼しく、そのいきはひなき物なり。これによりてことに末の世には、上古の風をいましむべき事にて侍り。

右に挙げた箇所が『野守鏡』の該当箇所である。まずはその内容を確認しておきたい。まず①で、『万葉集』の歌風でなく、『古今集』の歌風を真似るべきであるという。次に②では、為兼が『万葉集』の歌風を請い求めるためか、彼の歌に「おほす、き」の歌（『野守鏡』所収「萩の葉をよく／＼みれば今ぞしるたゞおほきなる薄なりけり」）のような、おおざっぱな歌が多いことを指摘し、為家の教えに背いていることを主張する。続く③からが、「いきはひ」と関わる部分である。③では、『万葉集』の時代は人の徳が高く、歌の心が時代に合致していたために、歌の心も詞もともにまっすぐで、儀式ばった姿があるという。④では、愛染明王が降魔の相のように恐ろしい姿をしていても、その内側に慈悲の心があるから、愛染明王に対すると尊く思われるようなものだと、『万葉集』の歌を例えている。⑤では、今は時代が下り、人が愚かで、『万葉集』の風体が時代に順応しておらず、『万葉集』の姿が詠み手自身にま

で届かないことを考慮しないで、それを真似ても、その風体に近づけるはずもないという。そして⑥で、為兼の歌風を幼い子に鬼の面を着けたようだと例え、ただ恐ろしげな外見だけが見えて弱弱しく、その「いきはひ」がないとする。つまり『野守鏡』の作者は、為兼の歌には「いきはひ」がないと言っているのである。

為兼歌に「いきはひ」がないのならば、それと比較されている万葉歌には「いきはひ」があるということであろう。万葉歌は、降魔の相を持ちながらも慈悲の心を持つ愛染明王に例えられている。恐ろしげで厳格な姿に慈悲の心が伴う愛染明王（万葉歌）は、向かい合うと崇敬の念を起こさせる。万葉歌と為兼歌を対照させる文脈上、この崇敬の念を起こさせる力を「いきはひ」と読み取ることができる。愛染明王の力に例えられた「いきはひ」は、鑑貨者の上に立ち、威厳を示す性質を伴うものである。このことは、『和歌抄』の「いきはひ」を考えるうえでも重要な視点になるように思われる。

先に、『和歌抄』において「いきはひ」は、万葉歌に顕著なものと捉えられていることを述べた。同時代の歌学書である『野守鏡』は、「いきはひ」をより具体的に、万葉

歌の威厳を備える要素と理解している。「いきほひ」は、万葉歌に顕著であることにその特質があり、特にその威厳と関わるものと考えられる。

四 万葉歌に「立ち並ぶ」意識について

「いきほひ」は、特に万葉歌の威厳を想定して用いられたと考えられる。そこで本章では、『和歌抄』に見られる為兼の万葉観について考察したい。わけても万葉歌に「立ち並ぶ」意識に注目する（傍線・※は稿者による）。

【3】稽古の心構え

古哥を多くおぼえ、家々の抄物を見るばかりによりて、哥の能よまれば、末代の人ぞ次第に見てはかしこくなるべき。⁽³⁾ されど人丸・赤人をはじめとして、われとまことあるところにて、たれをまなび、たれを本とせざりしかど、是にをよばぬをはづる事は古賢一同の事也。いにしへにたちならばんと思はるゝ、古におとらぬところは、いづくより、いかにぞすべきぞと、かなはぬまでも、これこそ委大事にてもあるに、たゞ姿詞のうはべをまなびて、立ならびたる心地せんは、叶侍

『為兼卿和歌抄』の歌評語「いきほひ」について

なんや。古人はわれと心ざしをのぶ。これはそれをまなばんとする心なれば、おほきにかはれる也。

【4】「寛平以往」の論

京極入道中納言（※定家）、「寛平以往の哥にたちならばんとよめば、物の心さとりしらぬ人はあたらしき事出きて、哥のみちあたらしくなりたりといふなるべし」といへり。まことにその理ふかきにこそ。されば鎌倉右府將軍に哥のみちをさづけ申にも、寛平以往の哥にたちならばむと読べきよしを申。

【5】詞を自由に用いた先達

是（※万葉歌）にたちならばんとむかへる人々の、心をさきとして、詞をほしきまゝにする時、同事をもよみ、先達のよまぬ詞をもはゝかる所なくよめる事は、入道皇太后宮大夫俊成、京極入道中納言、西行、慈鎮和尚などまで、殊⁽³⁾おほし。

右に挙げたように、為兼は万葉歌を称揚するとともに、それに「たちならばん」としている。なかでも【4】は、『近代秀歌』をふまえた言説であることが指摘されている。⁽³⁾ このことについて従来は、「たちならばん」を中心とする為兼の言説が、『近代秀歌』の主旨と異なることから、

「近代秀歌」を手許に置かず、かつ細かい点までは理解していなかったのだから⁽¹⁰⁾」や、「引用が正確でないのは記憶によるものか」と考察されてきた。しかし、為兼歌論を考察するにあたって重要なのは、引用が正確かどうかではなく、為兼が万葉歌をどのように理解していたかということであろう。右の引用箇所から、為兼は、万葉歌に「立ち並ぼう（肩を並べよう）」としていたことがわかる。万葉歌を格調高いものと捉え、それと同等の歌を詠もうとしていたのである。

先に、「いきほひ」が万葉歌に顕著で、威厳を伴う要素であることを述べた。右の事柄をふまえれば、為兼は、万葉歌に「立ち並ぶ」という強い意識のもとで「いきほひ」の歌評語を用いていたと考えられる。

藤平氏は、為兼の万葉尊重について、次のように述べておられる（傍線は私意による）⁽¹¹⁾。

俊成・定家・西行・慈円などの新古今歌人たちを「是（万葉）にたちならばむとむかへる人々」としているが、それは自由なことばづかいや修辭法の使用についてであり、万葉尊重も要するに「心の起るに随ひてほしきままに云ひ出だ」すことにあつて、その歴史的な

詩的特性の認識に拠っているのではない。（中略）為兼の万葉尊重は、和歌史的認識に立つて万葉歌風を生み出した態度と表現の特性を確認し、それを自己の作歌の原点とした、というわけではなく、主張しようとする自由な「心」の表現がそこに認められるという点においてなされているのである。

藤平氏のように、従来、為兼の万葉尊重については、その自由な「心」の表現に拠っていると説かれることが多かった⁽¹²⁾。しかし、『和歌抄』の「いきほひ」の性質を考察してきたことで、この見解に必ずしも合致しない一面が見えてきたように思われる。すなわち、為兼は万葉歌に肩を並べようとし、万葉歌のように威厳を含む要素として、「いきほひ」を認めていたと考えられることである⁽¹³⁾。

為兼は、万葉歌のような威厳を自身の理想とする和歌に取り込もうとしていたと考えられよう。「いきほひ」の要素から考えるに、為兼の万葉尊重は、万葉歌人の「心」の在り方にのみ拠つたものでなく、万葉歌の威厳に拠るところもあつたと考えられるのである⁽¹⁴⁾。

おわりに

本稿では、『和歌抄』において、為兼がなぜ「いきほひ」の言葉を用い、この要素にどのような意味づけをしていたのかを考察してきた。

本稿で明らかにした「いきほひ」の性質は大きく二点である。一点目は、対象に「なりかへり」、その「まこと」を明らかにしたうえで、内側で動く心をそのまま詠むという方法（Ⅱ為兼歌論の理想）によって、「いきほひ」が深くなるという性質である。この性質については、伏見院の判詞から、より具体的に理解することができる。すなわち、「いきほひ」とは、作者の発想の瞬間的な力（氣勢）によるものであつて、為兼歌論においては、作者の氣勢がそのまま歌の「いきほひ」となるということである。為兼は、発想の瞬間的な力（氣勢）を取り上げることの一つの目的として、「いきほひ」の歌評語を用いたと考えられる。

二点目は、威厳を伴う性質である。『和歌抄』や『野守鏡』において、「いきほひ」は万葉歌に顕著な要素として捉えられている。また、為兼は万葉歌に「立ち並ぶ」意識

を持っていた。「いきほひ」は、この「立ち並ぶ」意識に基づいた、威厳を伴う要素であつたと考えられる。

『和歌抄』の「いきほひ」という要素は、作者の発想の力（氣勢）が歌の性質となつたものであり、「心」をそのままに詠む為兼歌論において、初めて有効になる歌評語であつた。同時に、威厳を伴う要素でもあり、和歌そのものの格調高さを意識した表現でもある。

従来、思想面から研究されてきた為兼歌論であるが、本論では、「いきほひ」の歌評語に注目して考察した。これによって、為兼の和歌観の新たな一面も提示できたと思う。『和歌抄』について検討すべき課題はなお多いが、今後の課題としたい。

注

- (1) 四本の伝本のうち、(4)冷泉家時雨亭文庫蔵本（以下「冷泉家本」と称す）の書写年代は飛びぬけて古く、島津忠夫・赤瀬信吾氏は「室町初期までの写」（冷泉家時雨亭叢書「中世歌学集 書目集」解題、一九九五年、朝日新聞社）以下「時雨亭叢書」と略記する）、小川剛生氏は「室町中期」（『歌

論歌学集成第十卷」一九九九年、三弥井書店 以下「集成」と略記する」とされている。ただ、冷泉家本は虫損が多く、後半四分の一度の本文が欠脱している。島津・赤瀬氏によれば、冷泉家本も(1)宮内庁書陵部蔵本(以下「書陵部本」と称す)・(2)陽明文庫蔵本(以下「陽明文庫本」と称す)と同系統であると見てよく(なお、両氏は(3)聖護院門跡蔵本については指摘しておられない)、(1)書陵部本や(2)陽明文庫本は、冷泉家本の後半が完備していた時期に書写されたものと考えられている。(3)聖護院門跡蔵本については、その存在が大取一馬氏によって報告された(聖護院蔵書と門跡の文学活動)中世文芸論稿5、一九七九年五月、中世文芸談話会)。いまだ全容は明らかにされていないが、鈴木徳男氏の所蔵されている影印・翻刻資料を拝見させていただいたところ、(1)(2)と同系統の本文であると考えられる。

なお、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによれば、広島大学福井文庫(493)に、「書陵部本の新写」とされる「為兼卿和歌抄並三十首」があることが知られるが、未見。

(2) 久曾神昇「日本歌学大系 第四卷」解題、(一九四二年、文明社)参照。福田秀一「中世和歌史の研究」(一九七二年、角川書店、六六四・六六五頁 以下「和歌史」と略記する)参照。

(3) 「和歌史」六六五・六六六頁参照。

(4) 小西甚一「文鏡秘府論考 研究編 下」第四章二「唐代詩論の芸術論的意義」(一九四一年、大日本雄辯會講談社)、井口牧二「為兼歌論と仏教思想」(国文学研究72、一九八〇年十月、早稲田大学国文学会)、岩佐美代子「京極派和歌の研究 改訂増補新装版」第一章第一節「為兼歌論と唯識説」(二〇〇七年、笠間書院、旧版は一九八七年発行)など。

(5) 「和歌抄」本文の表記は、「いきほひ」「いきをひ」「いきおひ」の三通りがあるが、本論文では「いきほひ」に統一した。

(6) 小川氏は「集成」補注二三のなかで「二十番歌合」十九番を引用し、京極派歌論において「いきほひ」が「重視」されたことを述べておられる。

(7) 「和歌抄」の本文は、「集成」(底本(1)、主として(4)によって校訂)を用い、稿者としても、(1)宮内庁書陵部蔵「為兼卿和歌抄」(501・395) 国文学研究資料館マイクロフィルム画像データ、(2)陽明文庫蔵「為兼卿和歌抄」(近243/25) 濱口博彰、和泉書院影印叢刊8「陽明文庫蔵為兼卿和歌抄」京都大学附属図書館蔵為兼卿記(一九七九年、和泉書院)、(3)聖護院門跡蔵「為兼卿和歌抄」鈴木徳男氏所蔵の影印・翻刻資料、(4)冷泉家時雨亭文庫蔵「為兼卿和歌抄」『時雨亭叢書』によって本文の確認を行い、不審のある

箇所については注記した。

- (8) 以下、諸本の異同については、書陵部本—(書)、陽明文庫本—(陽)、聖護院本—(聖)、冷泉家本—(冷)の略号を以て示す。

〔異同〕(冷) いうも—(書)(陽)(聖) 優に。小川氏は、冷泉家本によって「優も」としている。また同氏は、「名詞として「優は」「優も」などと用いられた例は管見に入らないが、こは一首の「優艶さ・やさしさ」の意か」と注しておられる〔集成〕補注二三参照。

- (9) 〔異同〕(冷) をしなへて作者の□□□□□□かれもこれもすへてあらぬことなるゆへに—(書)(陽)(聖) をしなへてあらぬ事なるゆへに。

〔□〕で示しているのは、冷泉家本で本文が欠脱している箇所である。この部文の前後は、書陵部本他の本文では「優にいきをひも、をしなへてあらぬ事なるゆへに」とある箇所、島津・赤瀬氏は、冷泉家本の本文が「早く虫損で読めなくなっていたのを、ある時点で書写した本が、意味の通じるように省略した」と理解されている〔時雨亭叢書〕解題参照。

- (10) 〔集成〕五二頁・注九では、「個性、独創」とし、「文鏡秘府論」南卷の「所作詞句、莫用古語及今爛字旧意。改他旧語、移頭換尾、如此之人、終不長進。為無自性、不能專心

〔為兼卿和歌抄〕の歌評語「いきほひ」について

苦思、致見不成。(作る所の詞句は、古語及び今の爛字旧意を用ふ莫かれ。他の旧語を改めて、頭を移し尾を換ふ、此くの如きの人は、終に長進せず。自性無きが為に、専心苦思する能はず、見を致して成らず。)(興膳宏訳注「弘法大師空海全集 第五卷」、一九七六年、筑摩書房 三九七頁)を「借用する」と解説されている。

- (11) 注9参照。

- (12) 〔京極派歌人の研究 改訂新装版〕(二〇〇七年、笠間書院、旧版は一九七四年に発行)、一〇六頁参照。

- (13) 〔集成〕五九頁、注一九では、歌評語「優」と解しておられるが、稿者も同じ見解である。

- (14) 〔集成〕五八頁、注七では「この言説未詳」と述べられている。また補注四七で、〔京極中納言相語〕の「恋の歌をよむには凡骨の身を捨て、業平のふるまひけむ事を思ひいで、我身をみな業平になしてよむ」(『日本歌学大系 第三卷』)という教訓に「類似する」と指摘されている。

- (15) 対象との同化は、唯識説の「相應」の考えに基づくと考えられている(注4井口氏論文参照)。また、為兼歌論において歌道とは「万象の認識とその言語化」であり、その本質論を唯識説に依拠して説いていると理解されている(〔為兼卿和歌抄——京極為兼——藤平春男著作集 第3巻〕、一九九八年、笠間書院 以下「著作集」と略記する、

二二四・二二五頁参照)。

(16) 「まこと」『日本文学における美の構造』(一九七六年、雄山閣)二〇・二二頁より引用、参照。

(17) 福田秀一・井上宗雄「研究」、未刊国文資料「中世歌合集と研究(上)」(一九六八年、未刊国文資料刊行会 以下「歌合集」と略記する)参照。以下、概要については主に本書を参照した。

(18) 福田・井上氏は、「その判詞は、伏見上皇の執筆になると、四・五・十・十五番等の判詞から一目瞭然であろう」と述べられている(「歌合集」「研究」、二二五頁)。

(19) 「二十番歌合」の本文は「新編国歌大観」による。なお、私意によって句説点を改めた箇所がある。伝本は書陵部本・高松宮本・井上宗雄氏架蔵本の三本がある(井上宗雄「中世歌壇史の研究 南北朝期 改訂新版」、一九六五年、明治書院、一二七頁参照)。「歌合集」の校異によれば、書陵部本と井上氏架蔵本の間に大きな異同はない。

(20) (他出)「風雅集」雑中(はかりがたしやはかりがたしな) 1727。

(21) 日本詩人選15「京極為兼」(一九七一年、筑摩書房)一四一頁参照。「書経」にある禹貢伝説を典拠として指摘。「黒水・西河惟雍州。弱水既西、涇屬渭汭」(「黒水・西河は惟れ雍州。弱水は既に西し、涇は渭に屬き」)(加藤常賢

新釈漢文大系第25巻「書経(上)」、一九八三年、明治書院

八二頁)と「洪水滔天、浩浩懷山襄陵、下民昏墊。予乘四載、隨山刊木、暨益、奏庶鮮食。」(「洪水天を滔し、浩浩として山を懷み陵に襄り、下民昏墊す。予四載に乗り、山を隨ち木を刊り、益と庶の鮮食を奏む。」)(同、五五頁)の箇所「四載」は乗物を示しているから、当該歌は「四載」のうちの船から「重き舟」と「弱き水」の発想を得たとされる。そして「強弱勝劣」「大小高低」など「予定外の価値変換」は起こるものだから、「ものとして量り難」き世の中では「常住不変のところに腹をすえておく」必要があると理解し、「仏教的観念」にも通じるとされる。

(22) 藤井專英、新釈漢文大系第5巻「荀子(上)」(一九六一年、明治書院)。

(23) 国語国文学研究叢書第28巻「風雅和歌集論考」(一九七九年、校楓社)九〇・九一頁参照。この文言は、「平家物語」「貞観政要」「名文抄」にも見え、「花園院宸記」の「今年所學目録」に「貞観政要」「荀子」などが見えることを根拠とする。

(24) 注23の大坪氏論文による。

(25) 例えば次の歌などは、先学によって盛んに論じられている。

十五番 左

御製

山本の田面よりたつしら鷺の行方みればもりの一むら

右勝

為兼

鳥のみちの跡なきものを思ひたちて独しなけど人しらめ
やも

此右歌、尋常に詠出すべき事にも待らず、よく古賢の風に通じてまなび、もとめざるに自然に寛平以往の体に相叶ふか、そのところにいりても、あくまであはれに心くるしき所そひて、かたがた銘肝動心、各雖有褒美之氣、猶おそらくは、作者の本意に達してみしり心えん人、ありがたくやとおぼえ侍る、左歌、前権中納言藤原朝臣しきりに申すむねありといへども、尋常の歌、立ちならぶべきかぎりにあらずとて、被付勝字了

〔二十番歌合〕題「鳥」29・30

右の為兼歌について、例えば深津睦夫氏が「理想的な聖王の政治を実現しようと決意し、一人努力しているが、誰かそれを知っているだろうか」という解釈を示されている〔伏見院廿番歌合〕の為兼の歌二首について、皇學館大學紀要20、一九八二年一月、皇學館大學、七〇・七一頁。

(26) 注25深津氏論文参照。なお判詞については、「余人はともかく、自分は為兼の言動を理解し、心情を汲み取っていると、やさしく為兼に応える伏見院の返事」であり、判詞を

『為兼卿和歌抄』の歌評語「いきほひ」について

とおして「臣下と君が語り合っている」と解されている。

(27) 「京極為兼の歌一首——『伏見院廿番歌合』の「物としてはかりかたしや」の解釈——」(日本文学36・1、一九八七年一月、日本文学協会 七〇頁参照。「この歌は為兼(自己を含めた持明院統近臣たち)が同統(「おもき舟」)を支えるべき基盤でありながら、政權掌握の争いにそれを為し得なかつたことに「よはき水」認識を持ったところから出發している」と述べ、それによって同統を支えるべき「認識と責任の重大さ」を痛感し、その心情を主題として詠んだ歌が当該歌であると解釈されている。

(28) 『風雅和歌集全注釈』(二〇〇四年、笠間書院) 参照。

(29) 「いきほひ」の語を詳細に研究したものとして、成沢光「政治のことは 意味の歴史をめぐって」(二〇一二年、講談社学術文庫 原本は一九八四年に平凡社より刊行)がある。氏はそのなかで、漢字「勢」をあてる「いきほひ」は、「神人またはその集団の持つ強い力(中略)の活発な働き」を表し、その特質は、「力そのものよりは、働きの盛んな様相において表現された力、あるいは、力にかわる動的な何ものか」であるとされている(同書、七四頁)。「二十番歌合」判詞にある「いきほひ」は、この特質に合致するものと言えよう。

(30) 藤平氏は、「主客融一の美的観照論」と「心のままに詞

の「ほひゆく」という心詞論」が為兼歌論の二つの核心であると言われたうえで、その二つの核心が、傍線部のうち「そのまこと……心にことばをま〔か〕するに」の一節で結びつけられていると説かれている。また氏は、引用箇所「まこと」は、「主観と客観との融合のなかでとらえられる存在の実相、あるいは言語表現上に具現したものをさしている」とされているが、これは氏の言う「主客融一の美的観照論」の中心となる概念を意味するものと思われる（注16 藤平氏論文に同じ。二〇・二二頁）。

(31) 【本文】（書）（陽）（聖）う事にむきては（冷泉家本は欠脱）。小川氏は、「意により改」めている【集成】五六頁・注二七）。

(32) 【京極派和歌の研究 改訂増補新装版】（二〇〇七年、笠間書院、旧版は一九七四年に発行）三六・三七頁参照。成唯識論の心所相応門にある「触」（心を対象に向かわしめる作用）、「作意」（心を目覚めさせて対象にはたらかしめる作用）、「受」（意識のうちになんらかの印象を受け入れる作用）、「想」（対象のすがたを心にとらえる作用で、それを言葉にあらわす間接の因となるもの）、「思」（心を善・悪・無記にも作り、もって身・語・意の三業を作る心作用）、の五遍行の心所を当該箇所の本文に当てはめて、次のように解釈されている。

花にても月にても、夜のあけ日のくる、けしきにても、^{（二）}事にむきては（＝触）その事になりかへり（＝作意）、そのまことをあらはし（＝受）、其ありさまをおもひとめ（＝想）、それにつきてわがこゝろのはたらくやうをも（＝思）、心（＝識）にふかくあづけて（＝相応）、心にことばをまするに……

(33) 注（2）久曾神氏解題参照。なお久曾神氏以前に、寺崎修一「野守鏡考」（一九三五年二月、文化）によって言及されているらしいが（小川豊生「野守鏡」『和歌文学大辞典』二〇一四年、古典ライブラリー）未見。

(34) 【和歌史】六五六頁参照。

(35) 以下の「野守鏡」の引用本文は、宮内庁書陵部蔵本を底本とした『日本歌学大系 第四巻』による。

(36) 【異同】（書）（陽）（聖）あるへき―（冷）なるへき。小川氏は冷泉家本によって訂正されている【集成】五一頁、注二四・補注一八参照。

(37) 【異同】（書）（陽）（聖）よめるは―（冷）よめは。小川氏は冷泉家本によって訂正されている【集成】五一頁、注二五参照。

(38) 久松潜一校注、日本古典文学大系65『歌論集 能楽論集』（一九六一年、岩波書店）一五七頁・注三五参照。【集成】五一頁、注二四・補注一八参照。なお、小川氏は、『文鏡秘

府論』の「凡詩者、惟以敵古為上、不以寫古為能。」（凡そ詩は、惟だ古へに敵するを以て上と為し、古へを寫すを以て能と為さず。）」（興膳宏訳注『弘法大師空海全集 第五卷』一九七六年、筑摩書房、四五六頁）の「影響があるか」と指摘されている（『集成』五一頁・注二〇参照）。

(39) 注38 久松氏注補注二〇。

(40) 『集成』五一頁、注二四・補注一八。

(41) 『著作集』二二七・二三八頁。

(42) 『和歌史』六六五・六六六頁では、「万葉作者の作歌時の主体性、心の在り方を賞揚している」のであって、万葉歌風を庶幾しているのではないと説かれている。

(43) 成沢氏は注29の著書のなかで、「いきほひ」のうち主として、勢・威・徳・権の四語を取り上げられ、これらの特質をそれぞれ述べられたうえで、「イキホヒとは、自然・人間・神々に内在する霊的・呪術的な事象としての特徴を多分に持っている」（九八頁）と結論付けられている。また、「人は、力や徳あるいは法によるよりは、外なるイキホヒをシ」ることによって、「より有効な支配を実現し得た」（同）と述べておられる。『和歌抄』の「いきほひ」が、万葉歌の威厳を含む要素と考えられるのも、成沢氏の説かれた「いきほひ」の性質と同様の意味を持つと考えられよう。

(44) 谷宏「京極派と万葉との問題」（文学16・2、一九四八年

二月、岩波書店）では、京極派の万葉関心が、政教的な必要から出ており、『万葉集』が京極派歌人に「思想統制が効果的に行われた先蹤模範として」見られたと説かれている。谷氏の論には首肯できる面があり、「いきほひ」の歌評語も、和歌の政教性と関わるように思われる。

【付記】

聖護院門跡蔵『為兼卿和歌抄』については、相愛大学教授鈴木徳男氏に格別のご高配を賜った。記して深謝申し上げる。

（本学大学院博士後期課程）